

難波西鶴と

海の道

【86】

森田 雅也

前回から四編「武道伝来記」〔貞享4(1687)年刊〕巻七の三「新田原藤太」の薩摩の話の敵討ちです。ある夜番の際、百足退治をした沖浪大助は、平安時代の百足退治で有名な「田原藤太」だと言われて得意になってしまいます。

ところが後日、その場にいなかった上司南江主善に「田原藤太殿」とからかわれたことから逆上し、主善の屋敷へ乗り込み、主善や彼の弟などを斬り捨て逃走します。主善側には6歳の遺子善太郎しかいません。母とともに家来筋の家で16

歳まで養ってもらった善太郎は、親の敵を討ちたいと4、5年も無駄に過ごした後、四国にわたり、阿波の磯崎の庵に着きます。

善太郎はその夜、夢うつつのうちに、たけ10丈(約30メートルあまり)ほどの血みどろの百足が枕元に現れ、「私はそなたの故郷坊津に住むものです。そなたの敵は摂津の国小曾根(現西宮市)にいます」と告げて消えてしまいます。

そこで善太郎は、夜の明けを待って、早々に舟をもとめ、津の国に急ぎます。九州薩摩→四国磯崎→摂津西宮という経路は荒唐無稽と思われるかもしれ

ません。しかし、この連載では、題名にある「海の道」が江戸時代の難波と日本を結ぶ高速道路と同様の働きを果たしていたことを繰り返して述べてきました。決して荒唐無稽ではなくむしろ、納得できる経路なのです。

西宮に着いた善太郎は早速、村の貧家に立ち寄り、「この辺りに、もしや西国方面からやって来た者はいないか」と尋ねると「向こうの家の主人が、西の果てから来られた浪人だということですから教えてくれました。その家を訪ねると、人気がないので怪しく思い、中まて入ってみると、40歳ぐらいの女が産気づいたまま、憔悴し、今にも死にそうになっていました。

善太郎が、お産を助けてあげると、夫が西国の者であることを告げ、お礼を言います。以前に特集して、

むなしさ残る結果に

「西国」が「九州」を指すことは述べました。女は夫が7カ月前に亡くなり、忘れ形見が、今、生まれた女の子であること、もう一人遺児に19歳の兄がいるが、その子が親不孝で殺生好きであることを話してくれま

す。さらに息子の名前は父親の名をとって、「大七」。ついに親の敵「沖浪大助」の子だと分かりました。善太郎としては、この息子が大七が敵です。女に聞けば、大七は今日も父の残した大刀「百足丸」を振り回し、芥川(大阪高槻市)で殺生を繰り返しているとのことでした。

善太郎は芥川まで行き、途中で見事大七を討ち果たしますが、「むなしさ」だけが残る敵討ちとなりましたね。

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

善太郎の敵討ち